

ゲージ場の量子論 II 訂正

221 ページ 18 行目の「今度の場合, 前と異なり, ...」から、224 ページ 3 行目の「... の最終表式である。」までを、次のように書き換えます。

今度の場合, 前と異なり, NG ボソン変数 $U(x) \in G$ は, ゲージ群 $G_R \times G_L \simeq G \times G$ の元の半分しかない。そこで, G_R か G_L のどちらか一方のカイラル変換だけを次々に行なっていくって, $U(x)$ を 1 まで持っていくことにする。ここでは G_R で行なうことにすれば, 前の (8)~(12) と同様にして次式を得る:

$$\begin{aligned} & \Gamma[1, A_R^{U^{-1}}, A_L] - \Gamma[U, A_R, A_L] \\ &= -\frac{iN}{24\pi^2} \int_{M^4 \times I} \omega_4^1(\tilde{U}(t)\delta\tilde{U}^{-1}(t), A_R^{\tilde{U}(t)U^{-1}}). \end{aligned} \quad (26)$$

今度の場合, “積分定数項” $\Gamma[1, A_R^{U^{-1}}, A_L]$ は, 残念ながら, カイラル・ゲージ不変でないので落とすわけにゆかない。実際, カイラル・ゲージ変換 (24) の有限変換で, U は, $U \rightarrow U' = h_R U h_L^{-1}$ ($h_R \in G_R, h_L \in G_L$) と変換するから, $A_R^{U^{-1}}, A_L$ はそれぞれ

$$\begin{aligned} (A_R^{U^{-1}})' &= (A_R^{h_R})^{h_L U^{-1} h_R^{-1}} = A_R^{h_L U^{-1}} = (A_R^{U^{-1}})^{h_L} \\ (A_L)' &= (A_L)^{h_L} \end{aligned} \quad (27)$$

なる変換を受ける。[ここで $(A^{g_1})^{g_2} = A^{g_2 g_1}$ を用いた。] (27) 式は, $A_R^{U^{-1}}$ と A_L が共に h_L で変換されること, すなわち, 右・左共通の“ベクトルの”ゲージ変換 $h_V = h_L$ を受けることを意味している。それゆえ, $\Gamma[1, A_R^{U^{-1}}, A_L]$ の関数形を決めるには, $\Gamma[1, A_R, A_L]$ の“ベクトルの”ゲージ変換の無限小形 $v_R = v_L = v$ の下での変換性のみを調べればよい。この変換の下で, $U(x) = 1$ は不変にとどまるから, $\Gamma[1, A_R, A_L]$ は (25) より

$$\delta\Gamma[1, A_R, A_L] = -\frac{iN}{24\pi^2} \int_{M^4} [\omega_4^1(v, A_R) - \omega_4^1(v, A_L)] \quad (28)$$

を満たす。ところが、この式は、よく見れば **9 - 2** に与えた Bardeen の相殺項 (の逆符号のもの) $-\int \mathcal{Y}(A)$ の満たす式と同一である。なぜなら、**9 - 2** (35) (の $-iN/24\pi^2$ 倍) で、ベクトル的変換の場合に対応して $C_{1R} = C_{1L} = v$ と置いて v の一次項の \int_{M^4} 積分を見れば、左辺が (28) の右辺に一致し、右辺は第一項が $C_{1R} - C_{1L} = 0$ で消え第二項が $-\int \mathcal{Y}(A)$ の BRS 変換 δ となるからである。それゆえ、

$$\begin{aligned} \Gamma[1, A_R, A_L] &= -\int \mathcal{Y}(A_R, A_L) \\ &\quad + (\text{ベクトル的ゲージ変換で不変な項}) \end{aligned} \quad (29)$$

が成り立つ。ここで A_R, A_L に $A_R^{U^{-1}}, A_L$ を代入すれば、カイラル・ゲージ変換は $A_R^{U^{-1}}, A_L$ に対しベクトル的ゲージ変換 (27) となるから、 $-\int \mathcal{Y}(A_R^{U^{-1}}, A_L)$ 以外の項は、カイラルゲージ不変な斉次方程式 $\delta\Gamma = 0$ の解となり、落としてよいことがわかる。したがって、(25) の特解 $\Gamma_{\text{WZW}}[U, A_R, A_L]$ は、 $-\int \mathcal{Y}(A_R^{U^{-1}}, A_L) - [(26) \text{ 右辺}]$ で与えられる。(26) の右辺に対してさらに、前の (14) から (23) に至る変形を行えば、

$$\begin{aligned} \Gamma_{\text{WZW}}[U, A_R, A_L] &= \frac{iN}{24\pi^2} \left\{ \int_{M^4} \left[\alpha_4(dU \cdot U^{-1}, A_R) - \left(\frac{24\pi^2}{iN}\right) \mathcal{Y}(A_R^{U^{-1}}, A_L) \right] \right. \\ &\quad \left. + \frac{1}{10} \int_{M^4 \times I} \text{tr} \left[\left(U^{-1}(x, t)(d + \delta)U(x, t) \right)^5 \right] \right\} \end{aligned} \quad (30)$$

が得られる。ただし $U(x, t) \in G$ は、 $U(x, 0) = 1$ と $U(x, 1) = U(x)$ とをつなぐ任意の経路である。

G_R 変換のみを利用して求めたこの表式 (30) は、右・左の入れ換え — パリティ共役変換

$$A_R \longleftrightarrow A_L, \quad U \longleftrightarrow U^{-1} \quad (31)$$

の下での (反) 対称性が明白ではない。しかしながら、(21) の α_4 および **9 - 2** (37) の \mathcal{Y} の表式を用いて (30) をあらわに A_R, A_L, U で書き表してみれば、

次のような（反）対称性の明白な表式が得られる[†]:

$$\text{(変更無し)} \tag{32}$$

$$\text{(変更無し)} \tag{33}$$

ただし, p.c. は前項にパリティ共役変換 (31) を行って得られる項を表し, d はすぐうしろの項のみを微分するものとする。(32), (33) がカイラル群の場合の Wess-Zumino-Witten 項の最終表式である。

277 頁の略解 9.8 を次のように書き換えます。

9.8 9 - 3 (32) の $-Z$ (負号に注意) への, それぞれの項の寄与は,

$$\begin{aligned} \alpha_4(V, A_R) &\longrightarrow \text{tr} \left[V(A_R dA_R + dA_R A_R + A_R^3) - \frac{1}{2} V A_R V A_R - V^3 A_R \right] \\ -\mathcal{Y}(A_R^{U^{-1}}, A_L) &\longrightarrow \text{tr} \left[(F_R^{U^{-1}} + F_L)(A_R^{U^{-1}} A_L - A_L A_R^{U^{-1}}) \right. \\ &\quad \left. - ((A_R^{U^{-1}})^3 A_L - A_L^3 A_R^{U^{-1}}) + \frac{1}{2} A_R^{U^{-1}} A_L A_R^{U^{-1}} A_L \right] \end{aligned}$$

である。ただし, $V \equiv dU \cdot U^{-1} = -U dU^{-1}$ を用いた。 $v \equiv dU^{-1} \cdot U = -U^{-1} dU$ を導入し, $A_R^{U^{-1}} = U^{-1} A_R U - v$ の表式を代入して辛抱強く計算すればよい。このとき, 9 - 3 (32) 下の脚注に示した全微分項 $d(A_R U A_L dU^{-1})$ を加えることに注意せよ。また, 恒等式 $dv = v^2$ や $U v U^{-1} = -V$ 等を用いると便利である。

[†] (30) から (33) の結果を得る際に次の全微分項を落とした:

$$(-iN/48\pi^2) \int_{M^4} d(A_R U A_L dU^{-1}).$$